

四天王寺大学紀要 第64号（2017年9月）

英語教職科目における ALT との Team Teaching Training の実践方法

The Practice of Team Teaching Training between ALT
and JTE in the English teacher training course

奥 羽 充 規
Atsunori OKUBA

キーワード：ALT, JTE, Team Teaching, teacher's role & relationship, PDCA,

0. はじめに

東京でオリンピック・パラリンピックが開催される 2020 年に向けて、日本では「我が国の歴史、伝統文化、国語に関する教育を推進」¹⁾する動きが進行している。そして、グローバル化に対応した英語教育改革という名の改革がまさに実行に移されている。では、グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方とはどのようなものか。文部科学省（2013）が出した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、それを次のように説明している。

1. グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方

- 小学校中学年：活動型・週1～2コマ程度
 - ・コミュニケーション能力の素地を養う
 - ・学級担任を中心に指導
- 小学校高学年：教科型・週3コマ程度
（「モジュール授業」も活用）
 - ・初歩的な英語の運用能力を養う
 - ・英語指導力を備えた学級担任に加えて専科教員の積極的活用
- 中学校
 - ・身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養う
 - ・授業を英語で行うことを基本とする

1) 文部科学省（2013）「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」より

○ 高等学校

- 幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者とある程度流暢にやりとりができる能力を養う
- 授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化（発表、討論、交渉等）

また、同時に新たな英語教育の在り方実現のための体制整備として、①小学校における指導体制強化、②中・高等学校における指導体制強化、③外部人材の活用促進、④指導用教材等の開発、⑤教員養成課程・採用の改善充実などを挙げ、その主な施策について言及している。これら5点の体制整備はどれも急務な事項ではあるが、中でも、②中・高等学校における指導体制強化および③外部人材の活用促進、そして⑤教員養成課程・採用の改善充実の3点に関しては、大学において特に英語教員の養成課程に関わるものにとっては極めて注目すべき内容である。実際、その点を考慮にいれた教員養成をこれから学生に施すことが求められることは明白である。これら3点を簡単にまとめると以下ようになる。

- 中・高等学校において授業を英語で行い、言語活動を行うことが可能になるよう、教員の指導力・英語力を向上させること
- JTE や民間の ALT 等、外部人材のさらなる活用が不可欠
- 高度な英語力と指導法を身につけた教員の養成・採用が必要

つまり、多くの現役の英語教員の英語力・指導力ではできない授業を今後求めるということを示唆していると同時に、外部からの人材をますます採用することで、より英語コミュニケーションを重視した授業形態を円滑化させ、教員採用の段階ですでに英語コミュニケーションの即戦力となる教員を大学側が養成することを求めているということである。笠原（2016）は、四天王寺大学の英語教員志望の2年生に対して行ったアンケート結果から、教員を志望する学生の多くが、コミュニケーション能力を育成するための4技能を総合的に育成する学習活動とは何かを具体的にイメージできていないことを報告している。そのため教員養成課程においてそうした指導方法を実践的に教授する必要があることを指摘しているが、具体的にイメージできていないとはすなわち、自分たちの経験としてそのような授業を受けたことがないことを意味している。したがって、英語教員の教員養成の困難さは、まさに学生自身がこれまで受けたことのない体験的に未知の指導方法を身につけ、それを実践していくことにあるのである。

畢竟、今後ますます若手の英語教師はこれまで以上に言語活動を英語で行うための英語力、ALT との Team Teaching のための英語コミュニケーション能力、そしてそのような条件を生かすための指導法を身につけていかなければならない。本論文では、そのような状況に対応するための方策として、ALT との Team Teaching Training を英語科教育法の中で実践する事例として紹介する。学生にできるだけ英語コミュニケーション能力を磨かせる機会を与えるとともに、

ALT と実際に模擬授業の中でインタラクションを図らせることで、より実践的な中・高等学校で求められる授業の為の英語力を育むためのきっかけを与えるができるのではないかと考えられる。金谷（2012）が言及しているように、従来の教員養成・研修では質・量ともに求められている力をつけるには足りていない。したがって、そのような状況を改善する 1 つの取り組みとして実施する。

1. 中・高等学校の英語教育における Team Teaching

本章では、中・高等学校の英語教育における ALT との Team Teaching について言及する。そもそも、英語授業における Team Teaching とはどのような teaching を指し、そしてその形態としてはどんな在り方があるのかについて確認するとともに、現状における課題について説明していく。また、同時に Team Teaching をうまく成功させる点を明確にすることにより、その Training において取り扱う焦点のいくつかを紹介していく。

1.1 Team Teaching とは何か

米山（2011）は Team Teaching を以下のように説明している。

元来、総合的な学習のような広領域で扱うコースを複数の教員がそれぞれ得意とする分野を担当する授業形態を指すが、英語教育では ALT と日本人教師が教室に同席しているながら行う共同授業を言うことが多い。（英語教育指導法事典 p.352 より）

そして、その効用として以下の 6 点を挙げている。

- (1) 生きた英語に触れる機会
- (2) 英語を使う必然性
- (3) 英語を使う喜び
- (4) 英語圏文化の理解
- (5) 日本人教師の英語運用能力の向上
- (6) 教材開発の促進

英語教育の世界では、Team Teaching とは ALT と JTE の共同授業を指すことが多いのは周知の事実である。もちろん、JTE 同士の Team Teaching の英語授業も存在するが、いわゆる専門用語としては、前者を指すことが圧倒的に多い。その結果として上に挙げたような効用をもたらすことが可能な授業形態であり、JTE だけでは果たせない役割を ALT の存在が果たすことができるのもまた事実である。特に、(1) や (4) などに関しては JTE だけでは困難なこともあり、ALT との共同授業の価値は計り知れない。また、(2) や (3) に関しても ALT が教室に存在するだけで、英語を使う必然性や喜びを授業に参加している生徒が感じることができ、極め

て生き生きとした英語の授業を運営することができる可能性が生まれるのである。

そして、それはもちろん授業を受ける生徒だけではなく、共同の授業者たる JTE にも言えることである。(5) にもあるように ALT との Team Teaching は JTE の英語運用能力の向上につながる。かつて、「英語が使える日本人育成」をうたって実施された SELHi (Super English Language-high school) プロジェクトにおいて、SELHi 実施高校では ALT の配置が他校に優先された。その結果、ALT との Team Teaching の機会に多く恵まれ、多くの英語教師がそれぞれの英語運用能力を高めたというのは有名な話であろう。さらに、Team Teaching は JTE にとっても、(2) や (3) を実感できる授業であり、英語運用の為の効果的な動機づけとなりうると言える。

1.2 Team Teaching における役割分担

今井・松井(2008)は Team Teaching 成功のカギとして、「ALT との授業がうまくいく関係性」について言及している。実際、自分一人で授業設計し、授業を実施する普通の授業とは異なり、その関係性というものを考えておく必要がある。その問題については次項に譲るとして、ここでは日本の英語教育現場の Team Teaching において実施されている ALT と JTE の役割分担について説明する。当然ながら、その役割分担は Team Teaching の成功には大きな影響を与えるものであり、JTE として ALT と Team Teaching を実施するつもりならやはり事前に考慮すべきものである。

今井・松井は Team Teaching のタイプを次のように分類する。

表 1 TT (Team Teaching) のタイプと互いの役割分担²⁾

TT タイプ	ALT と JTE の役割分担
①役割分担型	ALT (活動指示) JTE (授業管理、説明)
②協調(競合)型	互いの役割を分けない。ALT が授業管理に関わる場面は少ないが、活動指示、説明は両方が行う。
③ ALT ゲスト型	ALT (特定の活動のみ) JTE (活動指示&授業管理)

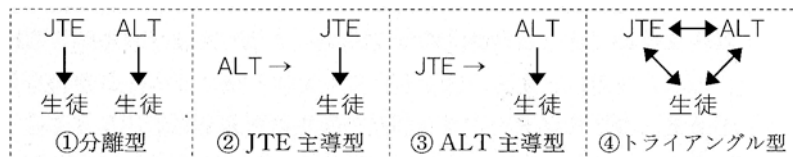
いわゆる「強い ALT」がいる教室などではあまりないが、ALT が一通りの指示を出したあとに、JTE が生徒の理解を確認し、さらには日本語で指示しなおすなどといったケースは②に相当する。普通の英語の授業において、英語を使った活動指示などを JTE が実施していない場合において多く見られ、JTE は ALT の英語による指示を生徒が理解しているかどうか不安なのである。次に、活動の指示のみが ALT の役割であり、さらに相手が活動や説明を担当している際にはお互いに踏み込まないといった役割分担をしているのが①のケースであり、衝突や混乱などを避ける方法として見られるものである。③に関しては、ALT は授業者というよりは特定の活動のみをお願いされているゲストであり、基本的に授業者は JTE のみというスタイルである。

2) 今井・松井(2008)「ALT との授業がうまくいく関係性とは」『英語教育』5月号 p.15 より引用

これらは、それぞれ JTE と ALT の呼吸があっていない役割分担の在り方であるが、JTE の置かれた状況によっては、そのようなスタイルをとらざるを得ないこともまた事実である。事前のリハーサルを通した相互理解や指導手順の習熟など必要なことは多々あるが、必ずしもそのような時間がとれるとは限らない。

また、卯城（1992, 1997）は以下のように Team Teaching のあり方を分類し、①～③の従来型を紹介するとともに、④のトライアングル型を提唱している。

表 2 卯城（1992, 1997）による TT（Team Teaching）分類



①は、JTE が言語材料についての説明を行い、ALT が英語でやり取りを行うといった、役割分担の完全分離である。②、③はそれぞれが中心の授業となっており、どちらかが主導となった場合には相手は補助であり、いわゆるチームとしての授業形態としては、形はともかく中身は伴われていない。それらに対して、④のトライアングル型は JTE, ALT, 生徒の 3 者が会話や活動で常に行ったり来たりするという三角形を形成する。ここでは、ALT と JTE が一方のみで単独で活動するのではなく、また役割分担を徹底して任せるのではなく、英語を通したコミュニケーションが成立する状況を成立させることが重要になるのである。大田（2016）は Team Teaching のポイントは「三角形の Interaction」と述べているが、大田は ALT と生徒、JTE と ALT の間の Interaction をいかに多く設けるかがカギとなると指摘する。つまり、いかに ALT と生徒の間の Interaction の機会を設け、かつ JTE と ALT の間のモデルとなる会話を生徒に提示するのが Team Teaching 成功のために必要な点なのである。

1.3 Team Teaching における課題

望月（2010）では、Team Teaching の課題として以下の 7 つを挙げる。

- (1) ALT の英語教育に関する専門的な知識や指導力の欠如
- (2) 滞在期間が 1 ～ 2 年と短く、ALT が変わればその学校ではまた一から積み重ねなければならない
- (3) すべての学校やクラスが定期的に ALT を迎えるには絶対数が足りない
- (4) 実際に近い言語行動は教室では不可能であり、目指すこと自体無理が生じる
- (5) 受験にはマイナスである
- (6) 生徒の数が多すぎて効果をあげることができない
- (7) ALT を招く代わりに日本人教師の海外留学を実現し、資質を向上させるべきである

これら 7 つの課題は Team Teaching を実践する上での問題というよりはむしろ ALT を雇用する上での環境的な問題（雇用形態や雇用数の問題など）であり、そしてシステムとしての問題

が主にここでは言及されている。文部科学省『英語教育実施状況調査』（2013）によると、「ALT等の外部人材は、1万2,000人。うちJETプログラムによるALTが4,000人であり、また、自治体の直接任用、労働者派遣契約によるもの及び請負契約によるものなどを合計すると約8,000人である。すべての英語の授業のうち小学校の58%、中学校の21%、高等学校の8%においてALTが活用されている。」と報告されているが、やはり、その環境はまだまだ整っているとは言えない。さらには、「受験にはマイナスである」といった、最終的に人格形成を目的とする学校教育の目的とはかけ離れた点や、「日本人教師の海外留学を実現すべきだ」といった英語教師の個人レベルの英語力向上を訴えている点は、日本の教育現場においてALTがまだまだその真価を発揮しきれていないことの表れであろう。

山岡（2008）はALTをresource personとして、informantとして活用するよう訴えているが、JETプログラム自体がALTとのTeam Teachingに関するノウハウなどが何もない状況からスタートしたこともあり、やはりその活用法に自信を持ってない教師が多々いるのは確かである。確かに、ALTは英語ネイティブとして、素晴らしい教材の作成者となり得るだけでなく、また英語文化の知識・経験の宝庫である。しかしながら、JTE側に彼らと共同で授業をするだけの余裕がないことも多分にあり得ることである。JTE自身の英語力の問題や授業準備の時間の問題もある。加えて、先ほど挙げた課題のうち、(1), (2), (3)のような要因を原因として、JTEとALTのチームの関係性を創り上げるのも多くの学校において容易ではない。いわゆる良好な「同僚性」を保つことが必要ではあるが、そこには環境的な要因が多分に関わってくるのである。しかしながら、今後の日本の英語教育の流れの中でALTとのTeam Teachingを通した授業指導は欠かすことはできない。環境的に不利な要因があるとしてもいかにしてJTEとALTが同僚性を高め、教師同士の協同関係を構築し、ともに生徒の能力育成を図っていくかは当然解決していくべき問題である。

2. Team Teaching Training がなぜ必要なのか

文部科学省が2014年9月に発表した『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言～』において、大学の教職課程の見直しの提言がなされている。また、同報告において、「多くの現職教員が、自分が受けてきた英語教育とは大きく異なる方法で指導や評価を行うことが求められ、そのことに対応できる教員を養成するための研修が課題となっている」と述べられている。さらに、同報告書は説明する。

「生徒の英語による言語活動が中心となる授業を展開する力が求められることから、4技能を総合的に育成するための指導法や、パフォーマンス評価等の評価方法などを含め、発表・討論・交渉などの言語活動の充実に対応した指導計画の作成、CBIなど実践的な指導法、効果的な指導による授業実践の映像を活用した演習、模擬授業や教材の効果的な活用に関する研究などを求めることとする。あわせて、学校での優れた授業実践の視察・研究や、マイクロ・ティーチング等の授業実践など、より実践的な内容にする必要がある。」

生徒の英語による言語活動の授業展開は教員による英語での授業展開が前提となる。また、4技能の統合としての授業計画の作成、コミュニケーションを支えるものとしての文法の扱いやその指導、ALT との Team Teaching の模擬授業など、見直しされる内容は目白押しである。

以下に教職課程の見直しの方向性として、以下のような具体的な内容が挙げられている。

[教職に関する科目（各教科の指導法）（例）]

- 英語で行うことを基本とする授業の意義・現状・課題
- 生徒の英語を用いた言語活動が中心の授業となる指導計画の作成
（生徒が実際に英語を使用する機会を増やすための言語活動、身近な話題から社会課題などをテーマにしたペア・ワークやグループ・ワークの展開方法等を含む）
- 教材開発、教科書・教材の効果的な活用に関する研究
- 語彙、表現、文法指導（言語活動を通じた語彙や表現の習得、コミュニケーションを支えるものとしての文法の扱い及び言語活動と一体化した文法指導を含む）
- ALT 等とのチーム・ティーチング、時事的な話題や社会課題などについて討論・交渉などを行う模擬授業
- グループによる指導計画案の作成から教材研究などを行うマイクロ・ティーチング
- 4技能の能力を適切に測ることができる評価方法（筆記テストに加え、特に「話すこと」や「書くこと」の能力を測るためのパフォーマンステスト等の在り方を含む）

上記の記載とは対照的に、平成 28 年に東京学芸大学が作成した、『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究授業 平成 28 年度報告書』では、「Ⅱ 中・高等学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム 解説」において、大学の教職科目の英語科の指導法の中でその学習項目⑬に「ALT とのチーム・ティーチング」として、その到達目標は「ALT 等とのチーム・ティーチングについて理解し、授業指導について生かすことができる。」とのみ記載されている。しかしながら、教育現場に出てすぐに即戦力を求められる教員に、「理解する」だけでは明らかに不十分である。大学の教員養成課程の現実的な指導体制を考慮した上での目標内容であると思われるが、その他の項目と同様に実践的な学習をすることが、その指導法の中に不可欠となるのである。現場で実践をするためには、やはりその訓練を行う場は必要である。

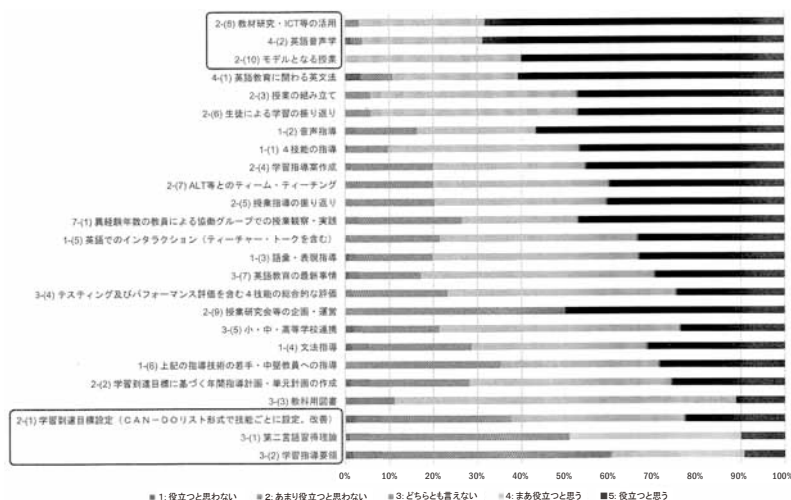
2.1 Team Teaching Training の目的

奥羽（2016）は、英語の教職科目の授業を受講している人文社会学部 3 年生を対象に、Oral Introduction を通した学生の模擬授業指導を実施しているが、その結果として多くの学生が自律的に英語を使うことにチャレンジし、使用した英語を振り返り、そして改善したと報告している。そして、そこでは PDCA サイクルを学生の学習形態として取り入れさせた結果、学生は積極的に取り組んでいた。また、学生が英語を使う動機づけとして、ネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションはそれを促進する大きな要因であり、奥羽（2016）の Oral Introduction

の指導との組み合わせでさらに効果が上がるのではないかと期待できる。

ALT との Team Teaching はほとんどの英語教師にとって現場に出てから初めて経験することが多い。しかしながら、表3に示しているように、『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究授業 平成28年度報告書』の中の「1. 検証アンケート」において、教員研修の内容で「ALT 等とのチーム・ティーチング」の項目はおよそ80%の教員が役に立つと答えている。したがって、現任教員ですらその研修は必要だと実感しており、これから教職に向かう学生にとっては明らかに有益な Training であると言える。

表3 各項目を学ぶことがどの程度役立つと思うか 回答者の割合

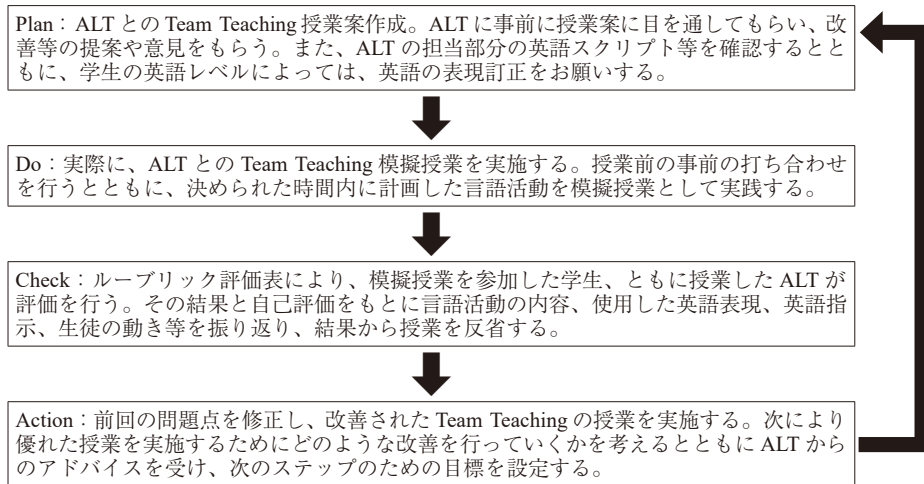


2.2 Team Teaching Training と PDCA サイクルの取り組み

江原（2017）の言及にあるように、PDCA サイクルは「教育実践を振り返り改善を図る方法のひとつ」である。そして今回、Plan-Do-Check-Action のサイクルを通して、学生が ALT との Team Teaching Training の中で自らの取り組みを計画、実行、検証、改善された実行を図っていくのである。ALT との Team Teaching で JTE が使用する英語の accuracy、実施した活動内容や活動のための指示の理解度など、多くの経験や他者からの指摘が無くてはその改善はたやすいものではない。したがって、同時に学習する仲間が存在する一定の人数規模のクラスでの訓練は、特に Check-Action を実施する環境を整えるものと言えるのである。

Team Teaching Training の為の PDCA サイクルの例として以下のようなものが考えられる。

表 4 PDCA サイクルを取り入れた Team Teaching Training の流れ



PDCA サイクルはもともと Quality Control（品質管理）を目的としてデミングが提唱したものである。また、それは基本的には仮説—検証—発見という科学的な操作の基本を具現化したものである。（渡部 2017）渡部は Plan の段階の立案はそれが仮説であるならば、最初から完璧な目標設定を作成する必要はなく、徐々に習得することを促すようにするべきであると主張する。すなわち、教育的効果として学生の成長を考えるのであれば、たとえ完璧と言えるものではなくても、実際やってみることでその問題点を浮き彫りにし、結果として自らがその学びを振り返るメタ認知能力を鍛えることも可能になるのである。特に、ALT をチームのメンバーとして実施する必要がある Team Teaching は JTE が 1 人で実施する授業形態ではないので、お互いの役割分担、協力体制なども含めて振り返る必要もあり、常に振り返る姿勢を持って授業改善を図ることは英語教師として極めて重要な行動であろう。

3. Team Teaching Training の実践例紹介

本論では、著者が平成 28 年 12 月～29 年 1 月にかけて英語科教育法の授業の中で実施した学生と ALT との Team Teaching Training についてその実践例を紹介する。以下にその手順を挙げる。

- ・実施回数：英語科教育法の授業の内、第 11 ～第 15 回の計 5 回
- ・対象学生：人文社会学部 英語教員志望の 3 年生等 15 名
- ・学生英語レベル：英検準 2 級～英検準 1 級
- ・使用テキスト：『NEW HORIZON English Course2, 3』（東京書籍）
- ・授業目的：① ALT との Team Teaching を経験する。
② メタ認知能力を磨き、自律的に英語の運用能力を鍛える。
③ ALT と授業計画を相談しながら教材作成を行う。

ALT は実際に関西の中学校において ALT として勤務した経験のある英語ネイティブを外部講師として招き、ALT との実際の Team Teaching の場面を設定し、オールイングリッシュの授業を学生に経験させるという名目で指導をお願いした。全 15 回の授業の内、第 11 ～第 15 回までの 5 回に参加していただいたが、授業の第 8 回～第 10 回において学生の Oral Introduction の指導および訓練をしており、学生には英語で授業を行うための最低限の準備はできている段階である。また、上記の Oral Introduction は奥羽（2016）における PDCA サイクルの手順で取り組んでおり、自分自身やクラスメイト間における reflective learning を実施してきている。そして、その事により ALT との Team Teaching Training に対しての情意フィルターを下げ、かつ Team Teaching を英語でやり遂げることへの自分への期待を高める効果を持つと期待した。

以下に、第 11 回～第 15 回における実際の授業活動及び手順について説明する。

第 11 回（Plan ①）

- ALT と英語でやり取りすることに挑戦する。簡単な 1 分間 Talk を学生全員が実施。他の学生を前にして、ALT と一対一で「天気、旅行、食べ物、スポーツ」といった Topic について会話する。ALT は学生の英語運用能力を確認するとともに、教員同士の立ち位置、授業を受ける生徒への Interaction の重要性について実践しながら説明する。



第 12 回（Plan ②）

- 著者のモデルを参考にして、学生が Team Teaching の指導案と英語スクリプトを作成し、ALT には英語のチェックをお願いする。学生には ALT との役割分担を考えさせ、言語活動の簡単な枠組みだけは固定する。学生は ALT との間でクイズを実施しながら後に生徒同士で行うコミュニケーション活動のモデルを示し、生徒の言語活動を促す。



第 13 回（Do）

- 実際に指導案通りに Team Teaching を実施する。基本的に各学生と ALT が Team を組み、他の学生は生徒役である。持ち時間は一人あたりおよそ 5 分間。決して短くはないが、準備が不十分であるならば、指導案通りに進まないことが多い。



第 14 回（Check）

- 前回の授業で実施した Team Teaching Training 後に記入した簡易ループリック表に基づいた評価を学生が検証していく。クラスメイトの評価、ALT による評価をもとに自己反省をしながら、改善点について考えるとともに、グループ内でお互いに改善点について話し合い、次の改善された Team Teaching の為の準備を行う。



第 15 回（Action）

- 事前に ALT に改善した指導案や英語スクリプトをメールで送り、その改善や他の提案等についてのフィードバックを受けた後、再び Team Teaching を実施する。模擬授業実施前には、各学生が 3 分間 ALT と打ち合わせを行う時間を設定する。この段階では、当然のことながら原稿等を見ることは ALT 以外は基本的に不可にしている。

JTE が個人で授業運営を行い、その英語クラスの中で英語による指示や説明を行うことと、ALT との Team Teaching ではその目的も、得られるものも異なる。中でも大きな違いは、ALT が Team として加わることによる、オーセンティックな英語の使用状況が生まれるということ

である。もちろん、事前にどのような英語を生徒の前でインプットとして使用するのかといった、生徒へのランゲージシャワーやモデルとしての英語を確認しておくことは当然であるが、役割分担としてどちらか一方のお任せ状態を作るのであれば、そこではリアルタイムのコミュニケーションが起きるのは当然のことである。実際、そうすることでこそ言語学習として使える英語として生徒に示すことができ、かつ JTE ⇄ ALT の Interaction はその流れのなかで生徒との Interaction を発生させることが容易となる。大田（2016）は教師の Small Talk の中に最近導入した言語材料を入れるよう ALT にお願いし、生徒との Interaction を意識することの大切さに言及しているが、コミュニケーション活動が起きている場ではそれも比較的容易に実現できる。

以上のような視点を持たせた上で、まずは ALT とのコミュニケーションを図る体験を PDCA の Plan 段階の導入として実施する。その上で、ALT との Team Teaching の言語活動の指導案を作成するためにイメージを強く作ることが学生に可能になり、ALT 側も学生の英語レベルや特徴を把握することができるのである。

次に、著者と ALT がモデルとして実施した Team Teaching を参考にしながら、学生は指導案と英語スクリプトを作成する。その後、授業前には ALT にメールで指導案等を送り、授業当日には Team Teaching を実施する。学生は自分のイメージの中で練習をしているが、この段階では打ち合わせもメールでの確認のみである。まずは、実際に指導案通りにやってみることで問題点が何か、何を改善し、今後どのような取り組みをするべきか考えさせるのである。授業する学生と ALT が Team Teaching で扱うクイズ形式の Q&A はそのトピックを中学校の英語教科書『NEW HORIZON English Course 2, 3』から各人に選択させている。

各学生の ALT との Do の段階での Team Teaching は図 4 のルーブリックによる評価を生徒役の他の学生と ALT が行う。その後、Check の段階として、各人の Team Teaching 授業を振り返り、結果を検証していくのである。ここでは、グループに分かれてお互いの Team Teaching についてフィードバックをし合うとともに、その改善点について考えていく。自己反省だけでは、具体的な改善点が生まれない場合でも、ルーブリックの点数を踏まえた他者からの具体的な評価があることで、次の目標が見えてくるのである。

表 5 Team Teaching 実践評価基準（ルーブリック評価表）

1. 準備はできていたか。(配布資料、練習、原稿を見ないその他)	5 4 3 2 1		
2. 生徒は教員の英語（活動の目的）を理解できたか。	5 4 3 2 1		
3. 生徒は活動に積極的に参加しようとしていたか。	5 4 3 2 1		
4. 時間内に予定の内容をし終えたか。(5minutes)	5 4 3 2 1		
5. ALT との役割分担がきちんとなされていたか。	5 4 3 2 1		
6. インプットとしての英語の使用はどうか。	5 4 3 2 1		
	5 : よくできている、	4 : できている	3 : どちらでもない
	2 : できていない	1 : できていない	

最後の Action の段階では、最初の Team Teaching の結果の検証を踏まえて、再び指導案や英語スクリプトを作成し、メールにてフィードバックを受けた上で Team Teaching を実践する。時間をかけて改善された同じ目的の授業を再び実施するわけであるが、Dörnyei (2001) による「時間はかかっても動機づけの質を発達させるほうが大きな成果を期待できる」の指摘にあるように、学生のメタ認知能力を高める仕組みを PDCA サイクルに組み込むことで、学生の動機を維持したまま、実践力を高めるための自律的な学習成果を引き出すことができるのではないかと推察する。プロの教師として現場に一度立てば、失敗をすることに大きな抵抗があるのは当然である。しかしながら、学び手は学生の立場であり、なおかつ授業内であれば大いに失敗し、そこから学ぶことでこそ、その後の学生の成長に大きくつながっていくのではないかと考えられるのである。

以下は ALT が学生の 1 人からメールで送られた Action 段階での英語スクリプトをフィードバックとして返したものである。

○学生英文スクリプト（ALT による添削、フィードバック済み、個人名は JTE と ALT に変更）
（ _____ ）は ALT によるコメント、フィードバック

JTE: We studied Career Day before. Do you remember that, _____? (Good intro! But we also usually greet each other and ask "How are you?", too)

ALT: Yes, I do. I went to a Newspaper Company

JTE: That was a great experience! So we need to study jobs more. Please give me some examples of jobs.

ALT: Sure. There are Doctors, teachers, chefs, journalists, soccer players, pianists, taxi drivers and so on.

JTE: wow thank you. Now I'll give you a question! Please listen to my hints and guess what job it is.

Are you OK?

ALT: OK!

JTE: I help people. I always wear a uniform. If you lose something or get lost or have any problems, please let me know! What is (it) my job?

ALT: Is it police officer?

JTE: Yes, it is! Good job! Next it's your turn. Please make a question!

ALT: I like clothes, bags and shoes. I make stylish shoes or cool clothes and nice bags. What is my job?

JTE: umm. Is it a clerk?

ALT: No. I make things to wear!

JTE: Is it a designer?

ALT: Yes, it is. That's right

JTE: Now everyone, please make a question about a job for your partner. I'll make you a partner. And I'll give you a card. Please make a question about the job on the card! Don't look to your partner. Do you understand? (Instead of asking this, ask comprehension questions like "What am I going to give you?" or "What's on the card?"). Everyone stand up. When you finish, you can sit down. Ok?? Let's start!

JTE: The next activity is a discussion. I'll give you a demonstration. Our topic is teachers and doctors.

JTE: I think teacher is a great job. (This is grammatically incorrect. The correct sentences would be either "I think a teacher has a great job" or "Being a teacher is a great job")

ALT: What makes you think so?

JTE: Because I like children and teaching something is interesting. How about you?

ALT: That's a good reason! But I think Doctor is the best. Because Doctor is a special job. Doctors can save people.

JTE: I see.

ALT: Now you try it like this. I'll make groups and choose your topic.

You are A, B, C

○Group A's topic is chefs and baseball players

○Group B's topic is police officers and post office workers

○Group C's topic is journalists and housewives

(Good idea for a final activity! How are you going to end it?)

上記の Team Teaching のトピックは「職業」であり、目的として簡単な生徒同士の Discussion を Q & A 形式で実施することである。ある特定の職業についてヒントを英語で説明し、相手はその職業名を聞いた英語から推測して答える。また、あくまでこのスクリプトは案であるので、ALT はこの会話の途中に生徒への Interaction を時々取り入れる。Interaction はループリックの評価項目に入れてはいなかったものの、ALT の学生への意識付けがなされるのである。

次に、この Team Teaching Training の後の学生のコメントを載せる。

- ・生徒との Interaction を自分からもっと図るべきだと思った。
- ・もっと臨機応変に英語で対応できるようになりたいと思った。
- ・ALT の先生の発音についていけるような発音を身につける必要があると実感した。
- ・自分では練習したつもりでしたが、まだまだ足りないことを実感した。
- ・教師の英語の説明の仕方、生徒の理解を図るための質問を投げかける必要性を学んだ。
- ・Team Teaching はとても難しいが、非常に勉強になった。
- ・ただ英語を覚えるだけではダメなことを実感したが、ALT とのやり取りは楽しかった。
- ・もっともっと、ALT を活用して生徒に生きた英語に触れる機会を作りたいと思った。
- ・活動の意図がよくわかる活動になっていた点は良かった。
- ・ALT と話すことで、余計に JTE の英語力が問われると感じた。
- ・前回と今回の Team Teaching を比べて、丁寧な指示の大切さを痛感しました。
- ・ALT の先生をいかすことができなかったことが課題です。もっと、ALT の先生と生徒の Interaction の場面を増やす工夫をすべきだった。
- ・まだ原稿をみる場面があったのが反省点です。

これらの学生のコメントからはまず、「ALT の活用がうまくできなかった」と答えている学生が多数存在したことがわかる。自分が英語で授業を展開することに集中してしまい、パートナーである ALT との関わりについて意識がまだまだ薄いといったところであろう。しかしながら、Team Teaching を通して自らそれを実感している点は評価に値する。少なくとも、その問題点を改善することが次回の目標になる。また、ALT との授業での関わりを通して発音や流暢さに関する「自分の英語力」への大きな振り返りの機会となった学生も多数存在する。自分一人で英語を使った授業展開をすることに慣れたとしても、その英語が生徒にとってモデルとなるかはやはり他者との比較を通してのみわかることである。それを学生各人がそれぞれ足りないところを実感したようである。

そして、「丁寧な指示の大切さ」や「生徒との Interaction の重要性」について気づいた学生も存在しているが、これらはまさに実践を通してしか理解できないことである。今回の Team Teaching Training の目的の 1 つに「ALT との Team Teaching を経験する」という内容があるが、それは言い換えると「Team Teaching でしか経験できないことを経験する」ということに他ならない。他者との比較、自己の反省による振り返りといった要素を通してメタ認知を高め、よ

り自律的な学習動機を持つために必要な経験がまさにそこにあると言える。

そして、メールのやりとりを通した教材作成であるが、実際の現場においても必ずしも ALT と勤務時間内に十分な打ち合わせに時間が取れるとは限らない。時にはメールや電話、そして授業開始 10 分前になどといった状況もありうるのである。ALT との Team Teaching を体験する Training とはまさにそのような現実にある状況もまた体験する必要があると思われる。そのうえで、学生のほとんどが中々思い通りにいかないジレンマを経験したことであろう。

4. 終わりに

本論文では、言語活動を英語で行うための英語力、ALT との Team Teaching のための英語コミュニケーション能力等を身につけるための方策として ALT との Team Teaching Training の実践方法についてその一例を紹介した。

第 1 章では、英語教育における Team Teaching とは何かについて言及するとともに、その役割分担や課題について説明した。

第 2 章では、なぜ Teaching Training が必要なのかについて、文部科学省（2014）『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の 5 つの提言～』において、大学の教職課程の見直しの提言がなされていることを紹介し、その中でこれからの英語教員養成の在り方はより実践的な英語授業の訓練や ALT との Team Teaching の経験が必要としていることが言及されていることを明らかにした。そして、Team Teaching Training の目的を挙げた上で、PDCA サイクルを通した Team Teaching Training の在り方を提案し、次章の実践についての枠組みに言及した。

第 3 章では、著者が実践した Team Teaching Training の手順を紹介するとともに、ALT と学生との Team Teaching Training を通した学生の反応を紹介した。その結果、学生は ALT との Team Teaching の体験を通して ALT との共同作業としての教材作成、自己の英語力や指示力に関する自己認識、さらなる成長のための目標を得ることができた。

2020 年に向けて日本の英語教育は、ますます英語による英語授業が主体の流れが進んでいくのは明らかである。英語教員の宿命とも言うべき、「自分たちが受けた経験の無い授業」を実践する英語教員になるためには、自らの殻を破り新しいことにチャレンジする心を育む必要がある。そして、それは教員養成課程を持った大学の責務である。なぜなら、教員養成課程として大学が学生を教育する段階だからこそ、我々は学生に失敗を恐れずチャレンジさせることができるからである。新しいこと、未知なるものには失敗はつきものである。しかしながら、自己の反省、クラスメイトとお互いのフィードバックを通した協同学習、ALT との英語比較などを通して自分の姿がはっきり見えてくることで、学生はより明確な目標を持つことが可能になる。そのような、学生がよりアクティブでそして自律的に学ぶことができる仕組みを持った指導が今後ますます必要となるであろう。

5. 参考文献

- Dörnyei, Z (2001) *Motivational Strategies in the language classroom*. Cambridge University Press.
- 今井裕之・松井かおり (2008) 「ALT との授業がうまくいく関係性とは」『英語教育』5月号大修館書店、15-17
- 江原美明 (2017) 「振り返り」の仕方を振り返る—新たな出発に向けた5つの視点」『英語教育』3月号大修館書店、10-12
- 大田洋 (2016) 『英語の授業が変わる50のポイント』光村書店
- 奥羽充規 (2016) 「英語教職科目における Oral Introduction の効果的指導法についての一考察 — Action Research の視点から—」『四天王寺大学 教育実践論集』(創刊号)、45-58
- 笠原一哉 (2016) 「4技能の総合的育成を目指した内容中心第二言語授業の実践と考察」『四天王寺大学教育実践論集』(創刊号)、87-98
- 金谷憲 (2012) 「英語授業は英語で」を目指して 課題と解決策」『英語教育』4月号大修館書店、10-12
- 小池田満 (2008) 「TT を成功させる方法」『英語教育』5月号大修館書店、31-33
- 城一道子 (2011) 「英語が苦手な大学生のための英語教育奮戦記」『英語教育』2月号大修館書店、20-21
- 東京学芸大学 (2017) 『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究授業 平成28年度報告書』
- 望月昭彦編 (2010) 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店
- 文部科学省 (2013) 「『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』について」
- 文部科学省 (2013) 『英語教育実施状況調査』
- 文部科学省 (2014) 『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言～』
- 山岡憲史 (2008) 「ALT をもっと活用しよう resource person として、informant として」『英語教育』5月号大修館書店、18-20
- 米山朝二 (2011) 『英語教育指導法事典』研究社
- 渡部良典 (2017) 「PDCA サイクルを取り入れた評価— CAN-DO リストを活用して」『英語教育』3月号大修館書店、13-15